

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

7.文化資源研究センター

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5481

7 文化資源研究センター

文化資源研究センターの設置目的

文化資源研究センター（英語名 Research Center for Cultural Resources）は、文化資源の体系的な管理と情報化、およびその共同利用や社会還元に向けて調査や研究開発を行うとともに、実際に事業を推進する際の企画・調整を行うことを目的として、2004年4月に設置された。

文化資源には、人間の文化にかかわるさまざまな有形のモノやそれについての情報のほか、身体化された知識・技法・ノウハウ、制度化された人的・組織的ネットワークや知的財産など、社会での活用が可能な資源とみなされるものが広く含まれる。こうした文化資源を人類共有の財産とすることで、グローバル化する世界で人びとが異なる文化への理解を深め、互いに共生していくための基盤を作り出そうというのが、文化資源研究センターのめざすところである。文化資源研究センターは、独自に研究事業を企画・運営するほか、文化資源関連事業として、館内、館外の研究者が参画して実施する多様な文化資源プロジェクト等の企画・調整を通して、文化資源の運用全般に寄与することを役割としている。

文化資源研究センターの研究事業

2013年度に文化資源研究センターが独自に実施した研究事業の概要は以下のとおりである。

- ・本館アクセスデザインの基本計画策定のため、ユーザー調査を行い問題点を収集するとともに、抽出された課題をふまえ、館内サイン計画、館外サイン計画、パンフレットデザイン、ウェブデザインの試作を行い、グラフィックサインの検討を行った。
- ・2014年度に実施する企画展「みんぱくおもちゃ博覧会——大阪府指定有形民俗文化財『時代玩具コレクション』」で資料情報データベースを公開するため、2013年3月に大阪府より寄贈された玩具約56,000点のうちの一部約200点について、コンテンツの作成を行った。
- ・独立行政法人日本万国博覧会記念機構が所蔵する各国パビリオン寄贈資料と世界民族資料調査収集団収集資料を受け入れるための情報整理作業を行った。

文化資源関連事業

文化資源に関する主な開発研究や事業は、文化資源関連事業として運営される。そのねらいは、目的、計画、経費、責任を明確にし、それぞれの成果を的確に評価して、さらなるプロジェクトの発展を図ることにある。文化資源関連事業は、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」「情報管理施設のプロジェクト的な業務」からなり、文化資源運営会議が毎年募集し、選定する。

また、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」は館内外の研究者の運営のもとで遂行されるが、文化資源研究センターや情報管理施設の専門スタッフの支援・協力を受けて、効率的かつ機動的に推進されている。

2013年度の文化資源関連事業の概要は以下のとおりである。

1. 運営体制

1) 文化資源関連事業の体制整備

2009年度から再編を実施した文化資源関連事業について、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」「情報管理施設のプロジェクト的な業務」の3種類のカテゴリーによって運用した。また、文化資源共同研究員の制度を運用し、共同利用体制を推進した。さらに外部有識者による意見をプロジェクトの審査に反映させた。

2) 本館展示新構築の体制整備

本館展示総括チームおよび各展示プロジェクトチームのリーダー等からなる拡大展示専門部会を開催し、新構築を円滑に進めた。2013年度新構築分（朝鮮半島の文化展示、中国地域の文化展示、日本の文化展示「沖縄の暮らし」「多みんぞくニホン」）について、実施設計に続いて展示施工を行い、完成させた。また、2014年度新構築分（東南アジア展示、南アジア展示）の基本設計を完成させた。

2. 文化資源プロジェクト

文化資源プロジェクトは、大学共同利用機関法人人間文化研究機構の第2期中期目標・中期計画に沿って、本館の大学共同利用機関法人としての共同利用基盤を整備するとともに、本館あるいは関連する他機関が所有する学術資源の体系化を進め、共同利用を促進し、学術的価値を高めるための研究プロジェクトである。

プロジェクトは、5つの分野（調査・収集、資料管理、情報化、展示、社会連携）に関わる研究開発、または研究成果の前記5分野への展開を目的とするもので、その成果は共同利用に供するとともに、社会への還元がで

きるものであることを前提とする。

1) 調査・収集分野

- ・2013年度の新構築により「朝鮮半島の文化」をより深く、わかりやすく理解するための映像による趣旨説明などのコンテンツの作成とプログラムを開発した。
- ・2012年12月に福建で行った海外映像取材の映像をもとに、研究用長編番組1本「漢族の祖先祭祀——福建省南部における一事例」、と短編3本のビデオテーク番組（「漢族の祖廟——中国福建省南部」、「福建省安溪県の烏龍茶 鉄観音」、「客家のふるさと 福建土楼」）を作成した。
- ・東南アジア展示新構築のテーマである「東南アジアの1日」を実現するために必要不可欠な資料を、インドネシア、マレーシア、タイ、ベトナム、ラオスなどにおいて収集した。
- ・沖縄研究資料の充実化および日本展示新構築の沖縄展示における展示資料としての活用を見据えて、近現代沖縄に関する文化資料の収集を行うとともに、日本在住の移民を対象とした映像取材を行った。
- ・20年以上にわたりほとんど収集が行われてこなかった中央アジア資料を充実させるため、カザフスタンの牧畜文化と日常生活に関わる資料、ウズベキスタンの織機と布文化資料、イスラーム・儀礼関連資料、音楽関連資料、社会主義関連資料などを収集した。
- ・2014年度に実施予定の南アジア展示場の新構築に向け、本館が所蔵する南アジア地域に関連する標本・映像音響資料を戦略的に充実させるため、ネパールの婚礼に関する映像音響資料収集および標本資料収集、ネパールの伝統的手工芸に関する標本資料収集、ブータンの山地民の生活に関する資料収集、南アジアの染織に関する標本資料収集、南アジアの都市の生活文化に関する標本資料収集、南アジアの宗教伝統の多様性に関する標本資料収集などを実施した。
- ・2012年度に取材した映像をもちいて、ロシア連邦トウバ国編、モンゴル国編、中国編、総集編の4種類のビデオテーク番組をそれぞれ日本語版、モンゴル語版、ロシア語版、中国語版、すなわち計16本制作した。さらに総集編は英語版も制作した。
- ・前年度の長浜曳山祭りで取材した映像をもとに、短編映像番組「長浜曳山まつり」を製作した。
- ・アメリカ合衆国におけるキルトの特徴、その文化的背景、そして最近の変遷に関する情報提示（展示）を念頭におき、色・パターンおよび用途において明確なジャンルを形成してきたアーミッシュ・キルトを中心に、19～21世紀キルト標本資料を収集した。
- ・2012年10月14日に本館講堂で開催した研究公演「遠い記憶、呼びさます声——ダナンマル家の南インド古典音楽」の映像記録素材を編集し、マルチメディア番組（日本語版、英語版）を製作した。
- ・2011年度までに現地取材した映像を編集し、ビデオテークの研究用番組「雲南省大理ペー族自治州大理市周城村」、さらに短編番組「雲南省ペー族の楽土」および「雲南省周城村の春節」の3本を製作した。
- ・2013年9月8日に実施した研究公演「のど歌のふるさと」の記録映像をもちいて、ビデオテーク番組を制作した。当研究公演は、ロシア連邦のアルタイ共和国など本館で初めて迎える地域からの研究公演であり、当日参加できなかった人ばかりでなく、当日参加した人たちからもビデオテークで再度鑑賞したいという希望が寄せられていた。
- ・現在公開を停止しているビデオテーク番組の再開とみんぱく映像民族誌DVD配布のために番組の字幕とナレーションの内容修正を行った。

2) 資料管理分野

- ・①有形文化資源の保存対策立案：総合的有害生物管理（IPM）の考えに基づいた生物被害防除・殺虫対策、②資料管理のための方法論策定：博物館の環境調査、収蔵庫の狭隘化対策、これら資料管理に係わる基礎研究・開発研究と事業を企画、実施、総括した。
- ・東日本大震災の文化財レスキュー事業の対象となった民俗資料が保管されている廃校を利用した一時保管場所の環境整備の方法論を策定することを目的とし、2013年度は、一時保管場所の運用について、施設内のIPM活動や直射日光対策について提言し、その活動の効果について明らかにした。

3) 情報化分野

- ・アジアを中心とする布地を含み、全地域の布地に着手してデータベース化を図った。その結果、2013年度はアフリカ521件、中南米394件、オセアニア317件の計1,232件のデータ公開を実現した。
- ・「オーストラリア・アボリジニ研究フィールド写真データベース」を館内公開したが、情報を追加し、更に充実して、カテゴリ検索と検索用ユーザ・インタフェースの改善を行った。同時に原資料の保存管理方法を確立した。
- ・本館収蔵の東京大学理学部人類学教室旧蔵資料（Kで始まる番号の資料）の原簿（『土俗品目録』）をスキャンしてデジタル化するとともに、そこに記されている内容を本館の標本資料学術データベースと照合できるよう

入力作業を進めた。

- ・アーカイブ資料に含まれるスライド写真6,163点のデジタル化を実施した。
- ・2012年度に本館のデータベース検索システムより公開した「京都大学学術調査隊写真コレクション」に2012年度デジタル化した5,216点をテキスト情報と共に追加した。各撮影者または著作権継承者との間で著作権全面譲渡の覚書の締結処理を進めたうえ、本館のデータベース検索システムより館内公開した。さらに、「京都大学学術調査隊写真コレクション」に7,644点ある京都大学探検部トンガ王国探検隊資料を本館のデータベース検索システムに追加して館内公開した。

4) 展示分野

・特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」

主催 国立民族学博物館
協賛 住友商事株式会社
特別協力 大英博物館、アンタナナリヴ大学附属芸術考古学博物館 (IC/MAA)
協力 マダガスカル航空日本事務所、日本万国博覧会記念機構、財団法人千里文化財団
後援 アジア太平洋無形文化遺産研究センター、ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所、大阪府、吹田市、吹田市教育委員会、日本アフリカ学会
実行委員 館内：飯田 卓（実行委員長）、岩谷洋史、上羽陽子、大貫美佐子（本館特別客員教員）、川瀬 慈
館外：朝岡知子（朝岡工房）、佐藤優香（東京大学）
開催期間 2013年3月14日～6月11日
入場者 34,762人

・特別展「渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum」

主催 国立民族学博物館
協賛 一般財団法人MRAハウス
後援 文部科学省、大阪府、大阪府教育委員会、吹田市、吹田市教育委員会、日本文化人類学会
協力 公益財団法人渋沢栄一記念財団渋沢史料館、埼玉県立歴史と民俗の博物館、神奈川大学日本常民文化研究所、財団法人宮本記念財団、渋沢栄一記念館、東北大学史料館、工学院大学図書館、流通経済大学図書館、西東京市中央図書館、星野リゾート青森屋、松涛館、八勝館、一般財団法人千里文化財団
実行委員 館内：近藤雅樹（実行委員長）、朝倉敏夫（統括責任者）、飯田 卓、太田心平、齋藤玲子、野林厚志
館外：井上 潤（渋沢史料館）、内田幸彦（埼玉県立歴史と民俗の博物館）、齋藤 純（天理大学）、佐藤美祢（埼玉県立歴史と民俗の博物館）、佐野賢治（神奈川大学日本常民文化研究所）、大明 敦（埼玉県立歴史と民俗の博物館）、武田晴人（東京大学）、宮本瑞夫（宮本記念財団）
開催期間 2013年9月19日～12月3日
入場者 25,654人

・国立新美術館企画展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」

会場 国立新美術館 企画展示室2E
主催 国立新美術館、国立民族学博物館
協力 国立情報学研究所、千里文化財団
後援 NHK プロモーション
実行委員 館内：吉田憲司（実行委員長）、上羽陽子、齋藤玲子、須藤健一、丸川雄三、山中由里子
館外：青木 保（国立新美術館）、足羽興志子（一橋大学）、春日直樹（一橋大学）、窪田幸子（神戸大学）、小泉潤二（大阪大学）、長屋光枝（国立新美術館）、南 雄介（国立新美術館）、山田由佳子（国立新美術館）
開催期間 2014年2月19日～6月9日
入場者 60,064人

・2014年秋特別展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」の展示準備

実行委員 館内：吉田憲司（実行委員長）、上羽陽子、齋藤玲子、須藤健一、丸川雄三、山中由里子
館外：青木 保（国立新美術館）、足羽興志子（一橋大学）、春日直樹（一橋大学）、窪田幸子（神戸大学）、小泉潤二（大阪大学）、長屋光枝（国立新美術館）、南 雄介（国立新美術館）、

山田由佳子（国立新美術館）

開催期間 2014年9月11日～12月9日

特別展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」の企画立案、作品選定、図録の編集執筆を進めた。

・企画展「アマゾンの生き物文化」

プロジェクトメンバー 館内：池谷和信

開催期間 2013年5月23日～8月18日

・企画展（連携展示）「武器をアートに——モザンビークにおける平和構築」

プロジェクトメンバー 館内：吉田憲司（リーダー）、小川さやか、川瀬 慈、平井京之介

館外：阿部健一（総合地球環境学研究所）、寺田匡宏（総合地球環境学研究所）、竹内よし子（えひめグローバルネットワーク）、横田美保（えひめグローバルネットワーク）フィエル・ドス・サントス、クリストヴァオ・カンハヴァト、ニコウラウ・ルイス（モザンビーク・キリスト教評議会）

開催期間 2013年7月11日～11月5日

・企画展「未知なる大地 グリーンランドの自然と文化」の展示準備として、2013年5月にデンマーク国立博物館の学芸員と、同年10月にグリーンランド国立博物館の学芸員と、展示内容について協議し、全体構想をとりまとめた。また、展示予定資料を確定させ、2014年3月末までに詳細設計を完成させた。さらに、借用予定資料トゥピラクの写真撮影を行った。

・企画展「シカチアリヤン岩絵展」（仮称）の展示準備として、2013年10月13日にプロジェクト共同研究員で企画展実行委員予定者の井出晃憲氏を招聘して、当年度の活動方針を決めるとともに、ユーラシアンクラブ代表の大野遼志がシカチアリヤン村に赴き、展示に使う民族資料の選定と一部日本への搬出を行った。2013年12月25日に井出、大野、浜田の各氏を招聘して、本館で展示の構成と内容についての討議を行い、今後どのような作業、どのような資料が必要になるのかを検討した。2014年3月30日に3回目の会合を開き、開催日程を決めるとともに、巡回する博物館を決定した。

・その他

・2013年度は、2008年度から開始された本館展示新構築の第6年次にあたり、日本の文化展示「沖縄のくらし」「多みんぞくニホン」、朝鮮半島の文化展示、中国地域の文化展示を新たに構築し、2014年3月に一般公開した。

・アイヌの文化展示新構築に向けて、2013年度は、7月と11月に研究会を開催し、現在のアイヌの文化展示の課題を洗い出し、その解決法についてアイデアを交換するとともに、新構築のゾーニングについて話し合った。併せて、どのような資料を収集すべきかについても意見交換をした。

・中央・北アジア展示新構築に向けて、2013年度の資料収集プロジェクトによって新たに購入された中央アジア関連資料の評価と、それを新構築する展示に活用するに際しての方針を策定した。

・新型ビデオテーク構想のためのコンテンツとして、展示記録のマルチメディア番組を4本試作し、公開するとともに、利用状況の分析を行った。また、モバイル型のビデオテークシステムを実験的に構築した。

・インフォメーションスタッフ用モバイル端末のwebアプリ化を進めると共に、来館者用にタブレット端末やスマホを用いた電子ガイドの試作版を作成した。また、コンテンツの充実を図るため、関西大学の学生などと検討会を開いた。

・「日本の文化」展示の新構築にともない、新たに必要となった電子ガイド用コンテンツ（日本語版、英語版、中国語版、韓国語版）を製作した。また、本年度の展示新構築のオープンに間に合うように、番号プレートを表示場に設置し、来館者へのサービスを開始した。

・多様な来館者がアクセスしやすく快適に観覧できるユニバーサルミュージアムの視点から、本館の既存のアクセスに関する各種サービスの課題を抽出し、指標作成と具体的なデザイン提案を行った。

5) 社会連携分野

・経年劣化等により運用を停止していた、みんぱく「極北を生きる」について、教育キットの内容を見直し、改訂版を2パック制作した。

・2013年8月6日に「学校と博物館でつくる国際理解教育——センセイもつくる・あそぶ・おどる・たのしむ」をテーマとして、日本国際理解教育学会との共催で開催した。参加者は教育機関教諭、大学生など計150名であった。

・社団法人北海道アイヌ協会苦小牧支部の協力の下に、2013年11月21日にカムイノミおよびアイヌ古式舞踊演舞を実施した。また、11月21日～11月24日の4日間にわたり、「アイヌ工芸 in みんぱく」と題して、同協会認定

の優秀工芸師による刺繍と木彫の実演と体験の指導、作品の解説等を行った。

- ・経年劣化が著しい、みんぱく「ジャワ文化をまとう」について、2014年度の改訂版製作に向けて、基本コンセプトと教育キットの内容を検討した。

3. 文化資源計画事業

「文化資源計画事業」は、研究成果を普及することを目的とした事業で、2つの分野（資料関連、展示・社会連携）に分けられる。

1) 資料関連分野

- ・韓国国立民俗博物館との交流協定に基づき、第2期3年計画の1年目として安東大学、梨花女子大学、韓国学中央研究院・ソウル芸術大学の3チームを選抜し、映像人類学に関する研修を行い、作品を制作させた。
- ・佐々木高明氏が1950年代～2000年前後にかけて日本、東南アジア、南アジアなどを対象にして調査した時の記録写真の寄贈を受け入れた。
- ・中国地域の展示新構築に欠かせない資料として、中国の漢族文化に関する標本資料、携帯用茶飲みセット（1点）、麺類を表す漢字のマグカップ（1点）、子孫桶（トイレ）用ブラシ（1点）、と客家土楼の模型（1点）の寄贈を受け入れた。
- ・大島襄二氏が1967年～1991年にかけてアジアや大洋州などを調査した時の記録写真（スライド8,776枚）の寄贈を受け入れた。
- ・松尾三憲氏のご遺族の方から絵葉書が1点見つかったとの連絡があり、松尾三憲旧蔵絵葉書コレクション（松尾三憲氏が1919年から1923年までの海軍在職中に訓練航海の途上訪れた現地で買い求めた絵葉書）の追加分として寄贈を受け入れた。
- ・2013年9月8日に実施した「のど歌のふるさと」のために来日したトゥバ共和国等からの演奏家一行を率いるモンゲンオール・オンダール氏は、演奏家であるとともに楽器製造者である。本人から、みずから制作したイギルと呼ばれる弦楽器の寄贈申し出があり、受け入れた。
- ・青年海外協力隊員としてモンゴルで絵画教師をしていた女性による、私的なコレクションのうち、最も古くて貴重であり、保存の難しいモンゴル伝統衣装（女性用）の寄贈申し込みを受けたため、資料を検討のうえ、受け入れた。
- ・「日本の文化展示」の新構築で新設した「多みんぞくニホン」において展示するために、在日外国人から寄贈申し出のあった標本資料を受け入れた。
- ・「日本の文化展示」の新構築で新設した「多みんぞくニホン」において展示するために、行徳モスクより、モスクの日曜学校に通う子どもたちによる貼り絵やぬり絵、モスクに通う人びとが日常的に身につけている衣服などの寄贈を受け入れた。
- ・田村克己氏が1970年代後半～2000年前後にかけて東南アジア・東アジアを対象にして調査した時の記録写真（デジタル化済み）の寄贈を受け入れた。
- ・吉岡政徳氏（神戸大学）より、バヌアツ共和国ペンテコスト（ラガ）島のパンダナスの葉で作成されたマット3枚の寄贈を受け入れた。
- ・2013年度に新構築した日本の文化展示の関連映像として、2006年度に制作した郷土玩具関連の映像番組6本について、マルチメディア番組としてビデオテークに新たに追加した。
- ・2013年度展示新構築の対象となる日本の文化展示のうち、沖縄のくらしセクション内、「シマのくらし」の展示資料として寄贈を受け入れた。
- ・独立行政法人日本万国博覧会記念機構の大阪府への移管にともない、機構が所有する各国パビリオン寄贈資料と世界民族資料調査収集団収集資料を、コレクションとして寄贈受入した。
- ・「マンダラ展」の巡回展示の際に作成された砂絵マンダラならびにその製作過程を記録した映像（DVテープに記録されている）の寄贈を受け入れた。
- ・エジプトを代表するベリーダンサー、ダンダシュから、来日の際に衣装を寄贈された。西アジア展示場に展示されていた2000年収集の衣装と定期的に入れ替える必要があるため、受け入れた。
- ・長野泰彦本館名誉教授と Marielle Prins 博士が作成し本館に寄贈された、中国四川省の西北部で話されるギャロン系諸語のデータベース（音声を含む）を受け入れ、2013年7月に本館のサーバーよりインターネットに一般公開した。
- ・2013年度末に新構築した中国地域の文化展示において、展示するために必要であった「チベット衣服、中国経典等資料」の寄贈を受け入れた。
- ・2013年度末に新構築した中国地域の文化展示において、展示するために必要であった「中国衣類資料」の寄贈

を受け入れた。

- ・2013年度末に新構築した中国地域の文化展示において、展示するために必要であった「中国地域チベット仏教関連資料」の寄贈を受け入れた。
- ・東京工業大学名誉教授 飯島 茂氏所蔵のパプア・ニューギニア、セビック河・ラム川流域で収集された、仮面、彫像等計49点の寄贈を受け入れた。
- ・文化庁長官、東宮大夫を歴任された安嶋 彌氏が所蔵されていたタンザニアの木彫1点の寄贈を受け入れた。
- ・財団法人日本繊維意匠センター旧蔵の繊維産業関連資料（第2次世界大戦後の日本の繊維産業の輸出振興をおもな目的として1955年に設立された日本繊維意匠センターが収集し、作成したプリント布をはじめとする繊維製品の見本裂を貼付した標本資料の寄贈を受け入れた。
- ・横田みどり氏がインドネシア、インド、イランで入手された総計29点の染織品を本館の標本資料として受け入れた。

2) 展示・社会連携分野

・企画展（国際連携展示）「アリラン—— The Soul of Korea」

事業メンバー 館内：朝倉敏夫（リーダー）、福岡正太、太田心平、呉屋淳子

開催期間 2013年5月2日～6月11日

・企画展（国際連携展示）「台湾平埔族の歴史と文化」

事業メンバー 館内：野林厚志

開催期間 2013年9月12日～11月26日

- ・2011年度に新構築したヨーロッパ展示場において、オープニング後に実施したアンケート調査を踏まえ検討・精査したうえで展示の充実および安全性の向上を図った。
- ・春の特別展関連ワークショップ、夏期休暇期間のこどもワークショップ、秋の特別展関連ワークショップ、年末年始展示イベント関連ワークショップ、春のこどもワークショップの実施とワークシートの運用等を実施した。ワークショップ回数は合計10回、総参加者数は184人であった。
- ・国立民族学博物館におけるボランティア活動者の受入要項に基づき、登録したボランティア団体であるMMP（みんなくミュージアムパートナーズ）および地球おはなし村の活動支援を行った。

3) その他

- ・2014年の干支である「うま」に関する資料を本館の所蔵資料の中から選び、本館2階探求ひろば横休憩所に展示し、「うま」にまつわる文化の紹介・解説を行った。合わせて、展示活動研修会を実施し、研修参加者が撮影した写真パネルを同所で展示した。
- ・本館の研究活動を来館者に紹介するため、大型（60"）のタッチパネルモニタを用いた情報提供システムを構築し、多機能端末室に設置した。また、車イスの利用者への利便性の考慮と、他の場所での情報提供に活用できるように小型（20"）の装置も導入した。

4. 情報管理施設のプロジェクト的な業務

「情報管理施設のプロジェクト的な業務」は、情報管理施設が実施する、文化資源に関する研究支援業務である。

- ・みんなくは、151の学校や社会教育施設に、延べ227回の貸出を行った。また、貸出先での紛失や破損に伴う補修、老朽化した資料の交換等を行った。
- ・第3収蔵庫1層資料 4,079点の配架見直しおよび再配架作業を行い、標本資料の収蔵状況を改善し、新たな配架空間を確保した。
- ・日本の文化展示の撤去資料 447点の点検を行い、長期間展示されていた資料に関する情報のデータ作成および適切なクリーニングを行い、収蔵庫に再配架した。
- ・2013年度の新構築に選定された資料 116点や特別展示等の展示に選定された資料、緊急に補修する必要がある資料などの補修を行い、資料を良好な状態で展示し活用した。
- ・標本資料 5,233点の写真撮影および測定を行った。
- ・本館所蔵のPhotoCDから媒体変換を行った画像データのうち約49,000点および、写真をデジタル化した画像データ約2万点をサーバーに登録するためのメタデータを作成し、登録作業を行った。これにより約30万点の登録が完了した。
- ・本館所蔵映像資料であるD3テープは、再生機器の老朽化により早急な媒体変換が必要となっている。本年度は、257本のD3テープをXDCAM（PD128：87枚、PD50：23枚）へ複製を行った。
- ・本館製作のビデオテーク番組や研究用映像から10本を選び、みんなく映像民族誌第10集～第13集として4枚のDVDにまとめた。これを800セット分プレスし、609か所の図書館や研究機関等に配布した他、テーマに応じ、

個別のDVDを学会等に配布した。

- ・本館所蔵の音響資料である金属原盤に、前年度調査を行った結果から媒体番号(7,629件)を付与し、レコードケースに記入した。また、福岡准教授を中心として進められてきた調査研究の成果である金属原盤のデータベースにも媒体番号を入力した。
- ・本館が取材を行い作成した作品の原版フィルム704本を対象に、A-Dストリップスを封入した後、一定の時間を置いて酸性度を調査した。その結果、劣化の進んでいるものが3本見つかったため、保管庫に設置している酢酸吸着フィルター棚に一定の期間置き、酸性ガスを発散させることとなった。
- ・アーカイブズ資料として受け入れた「欧米博物館所蔵アイヌ資料調査記録」等に含まれる写真資料のポジフィルム(20,939コマ)とネガフィルム(31,510コマ)にコレクション番号を付与し、各専用収納包材に収納後、映像音響資料収蔵庫に保管した。
- ・標本資料詳細情報データベースの校閲・入力(28,907件)、標本資料目録情報データベースの追加・校閲・入力(85,334件)、標本資料画像データの校閲(22,913件)、記事索引データベースのデータ追加入力・校正(8,500件)の作業を行った。

